

エストロゲンと脂質異常症

佐山 遥平／寺本 民生

Summary

性差が関与する疾患として、骨粗鬆症と並び閉経後に認められる動脈硬化の危険因子である脂質異常症が挙げられる。これには多面的な動脈硬化抑制作用を有するエストロゲンの低下が関与しており、閉経後の女性では動脈硬化性疾患の割合が上昇する。ホルモン補充療法(HRT)についてはさまざまな研究が行われているが、閉経後女性の脂質異常症改善や動脈硬化性疾患予防のためのHRTについては、治療となるだけの確固たるデータはまだなく、現在研究が進められており、今後のさらなる検討が待たれる。

Key words

動脈硬化
脂質異常症
エストロゲン
ホルモン補充療法(HRT)

はじめに

性差医療において最も留意すべきことは、女性のライフステージによる変化である。特に閉経後に認められる動脈硬化の危険因子である脂質異常症は、骨粗鬆症と並んで代表的な性差が関与する疾患である。

男性ホルモンと比較し女性ホルモンは月経に伴う周期的な変化が認められ閉経後は急速に低下する。女性ホルモンの1つであるエストロゲンは多面的に動脈硬化抑制作用があることから、閉経後の女性は動脈硬化性疾患が増加する。

米国のフラミンガム研究¹⁾では、40～50歳の閉経前女性と閉経後女性との比較で、冠動脈疾患の罹患率に有意な差を認めている。若年女性では冠動脈疾患や脳梗塞などの動脈硬化性疾患は少ないが、50歳から急速に増加し、最終的には男性と同じレベルまで達する²⁾。

わが国における女性の平均寿命は延び続けており、“閉経後の動脈硬化”に対応する場面は今後も増えていくことだろう。本稿では、閉経後のエストロゲン低下に伴う多面的な影響と、ホルモン補充療法(hormone replacement therapy ; HRT)について概説する。

エストロゲンの動脈硬化に対する直接的作用

血管内皮細胞から産生される一酸化窒素(nitric oxide ; NO)は、L-アルギニン塩酸塩から一酸化

Youhei Sayama
帝京大学医学部附属病院内分泌代謝内科

Tamio Teramoto
帝京大学医学部臨床研究医学講座特任教授／
帝京大学臨床研究センターセンター長